

翻 訳

ジョン・ノックスによる宗教改革文書 (2)

The Reformation Pamphlets by John Knox (2)

— スコットランド貴族と身分制議会に提出された

— 司教とカトリック聖職者により宣告された判決故のアペレイション (3) —

The Appellation from the Sentence Pronounced by the Bishops and Clergy: Addressed to the Nobility and Estates of Scotland (3)

伊勢田 奈 緒

1. 緒言
2. 翻訳

1. 緒言

本稿はスコットランドの宗教改革者ジョン・ノックスの抵抗権の問題を扱っている論文「アペレイション」の続きである。ノックスは、不敬虔な君主、あるいは、これと結びついているローマ教会の司教の行動を抑制する存在として、王国内の貴族階級および身分制議会に注目して、これらに期待した。同時に、彼は王国内のひとりひとり、国民にも期待を寄せている。貴族階級と身分制議会には上級権威に対抗することが出来る唯一の階級であると、見なしている。ノックスは改革の具体的な方法としてモーセの言葉を挙げて、偶像崇拜者を死刑に処すべきと主張した。処罰権は主要な統治者と区別される貴族階級および身分制議会、すなわち、下級権威にあるとし、これと並んで国民もまた所有しているとしている。

(尚、拙訳は一次史料Laing, David, ed. (1895), *The Works of John Knox*, vol.4 Edinburgh, pp.491–503の訳であるが、以下を参照した。

Roger A. Mason, ed. (1994), *John Knox, On Rebellion*, pp.92–101)

2. 翻訳

そして、人が神に示すことが出来る、主なる栄光に堅くたって、神の宗教を見下す者を従わせることは、どのように可能なのか、また、神が特に王や統治者たちを必要とする務めは、どのように可能なのか。このことは、聖アウグスティヌス¹⁾が明白に記している、武人であるボニファキウスに書いていますが、この論議に従って、わたしは、懸命に、閣下たちに納得させたいのです。というのは、彼は、この書簡の中で、ドナティスト²⁾とアリウス³⁾主義の異教徒の違いをはっきり

1) Augustinus (354–430) 西方教会最大の教父。古代の思想を集大成し中世の世界を開いた人である。キリスト教信仰と思想との豊かな源泉として今日に至るまでカトリック、プロテスタントの両陣営から注目されている。

2) ドナティウス (Donatus) 主義は4世紀のヌミディアの司教で、北アフリカの教会でのドナティウス名にちなんだ運動である。帝国の迫害とアウ

グスティヌスのようなキリスト教神学者の反対にもかかわらず、7世紀までドナティウス派の教会の浄化と神聖に関する主張と司祭職は影響しているままであった。

3) アリウス (Arius : 250–336) はキリスト教の祭司で、キリストの神聖の否定は異端アリウス主義として知られるようになった。彼の教えは325年のニカイア会議で非難された。

と述べ、彼らの残忍性をいくらか語った後、彼は、いかにして彼らの猛威を抑えられるか、その方法を示し、そして、邪悪な者に苦しめられている者が敬虔なる行政官に保護や弁護を求めることは合法的なことであるとするのです。これに対して彼は次のように書いています。「真理について沈黙するのか、さもなければ、彼らの野蛮さに耐えるのか。しかし、もし、真理について沈黙しているならば、だれも、救われも、助けられもしないばかりか、多くの者が、彼らの誘惑に負けて、滅ぼされるだろう。しかし、もし、真実の教えによって、彼らの猛威が、荒れ狂うように挑発されるならば、その方法によって、ある者は救われ、強くなるであろうが、もし、彼らの激しさが留まらせられないなら、恐れが、弱い者をおそって、真理に従うことを阻止するであろう。」と。これらの初めの言葉の中に、アウグスティヌスは、なぜ、当時苦しめられた教会が、迫害者たちの狂暴に対して、皇帝や敬虔なる行政官の助けを求めたか、その理由を3つ、示しています。まず、真理は、語らなければならない。さもなければ、人間は、罪の中に滅びることになる。第二に、明確に語られる真理は、狂暴な敵を憤慨させる。そして、ある者は、人による助けを求めるよりもむしろ、私たちはすべての邪悪に苦しむべきであると主張する。第三について彼は言う。すなわち、多くの弱い者は、迫害に苦しむことはできず、真理のため、死ぬことはできず、それにもかかわらず、留意すべき事は、誤りから勝つことができるというのではなく、より強くなれることであるとしています。

おお、この時代の統治者たちは、この敬虔なる著述家の理由をじっくりと考えるべきです。そして、次の言葉の中に、彼が必要とした救済法があります。「教会がこうして苦しめられているとき、もし、キリスト教の皇帝たちにより与えられるような神の援助を嘆願すべきではなく、むしろ、すべての不運を堪え忍ぶべきであったと考える者は皆、このような用心を怠って、何も求めないでいることに何らかのよい報いを与えられなかったという点に少しも注目していないのである。そのよ

うなことに對して、正当な法は彼らの不敬虔に反対して作られるべきではないように、使徒たちが、この世の王たちのそのようなことを求めていないことを主張して、彼らは、今あること、そして、全てのことが彼ら自身の時に成されることよりほかの昔のことを考えないのである。キリストを信じた皇帝が、不敬虔に反対して、敬神のため法を作って、神に仕えたが、一方、預言者の語ることは完璧であった。『なにゆえ、国々は憤激し、人々はむなしく声をあげるのか？なにゆえ、地上の王は立ち上がり、支配者は結束して、主に逆らい、主の油注がれた方に逆らうのか。』⁴⁾ そのことは、同じ詩篇で後に言われているが、未だ起きていなかったことである。『だから、おお、すべての王たちよ、今や理解せよ、地上を支配するあなた方は論しを受けなさい。畏れを持って主に仕え、主をおののきつつ、喜びなさい。』⁵⁾ と。王たちは、畏れの中にあるにもかかわらず、主の命令に逆らって処罰し、敬虔なる厳しさにより、禁ずるが、では王たちは主にどのようにして仕えるというのか？王は人である限り、主に仕え、王である限り、主に仕えるのである。王は人である限り、忠実に生きることによって主に仕え、しかし、また王であるため、正しいことを命じ、反することを厳しく禁じる法に仕えるべきである。ヒゼキアは、主に仕え、林や偶像の神殿や神の命令に反して作られた場所を破壊した。また、ヨシアも、同じようなことをした。ニネベの王は、主に仕えて、全市を無理に従わせて、主の苦しみを鎮めた。ダリウスは、主に仕え、ダニエルの方で偶像を破壊し、ライオンに彼の敵を投げた。ネブカドネツアルは主に仕え、彼の王国で神を冒瀆する全てを恐ろしい法によって禁じた。ここに、故に王である限り、彼らは主に仕えられるとするのである。王以外のだれも、王たちが主に仕えるやり方では仕えることができないのである。さらに彼は邪悪な王たちが不敬虔に統治するとき、法によって抑えることは出来

4) 詩編2編1、2節参照。

5) 詩編2編10、11節参照。

ず、むしろ、暴政は、法の名の下に行使されるのであるが、しかし神の知と栄光を告白する王たちは彼らの支配における神の教会を守る者を氣遣っていないとか、あるいは教会を攻撃する者に注意していないということはまったくないのである」と話を結んでいます。

古代の敬虔なる著述家のこれらの言葉により、閣下たちは、たぶん、私が貴方方を必要としていることに気づくことでしょう。すなわち、貴方方の司教たちの暴政を鎮圧し、真理を告白する罪のない者たちを守ることに貴方方が必要なのです。神はキリストに告白した皇帝や王たちを必要とし、そして明白に彼らが、そのようにする以外、キリストに仕えることが出来ないことを結論しました。アウグスティヌスが教会と呼んだので、彼らのために語ったと貴方方の司教たちに思わせてはなりません。アウグスティヌスは、真理を告白する教会のために書き、迫害に苦しんでいる人を守るために書いたことを彼らに読ませ、理解させなさい。そして、貴方方の司教たちはそのようにせず、むしろ、キリストの永遠の真理を大胆に言い、彼らの不正や忌まわしいことを明らかにしたすべての者を、ドナティウスやアリウス主義者のように残酷に迫害したのであります。しかし、私たちは、アウグスティヌスのことを次のように理解するのであります。すなわち、王は神に負っており、律法の下にあって、以前と同様、今も福音書の時代と同様に、宗教の事柄で苦しめられている人々を守り、厳しい敬虔なる律法によって、迫害者たちへの狂暴を押し、主に服従し、仕えることは、王たちに属している務めであるのです。というのは、そのことを預言者イザヤははっきりと言っていますから。「王たちが神の教会に養われる。そして、彼らはひれ伏し、神の子を抱く」⁶⁾と。そして、私は言いたいのだが、閣下たちは、神が福音書の時代にも律法の時代にも統治者や支配者の服従を必要としたことを見いだすでしょう。

もし、貴方方が、宗教の改革と苦しめられている者たちを守ることは、貴方たちの権限に属していないとするならば、つまり、貴方方は、王でなく、王国の貴族であり、身分制議会であるのでと思うのなら、2つの点で貴方方は誤っています。第一に、貴方たちは、ダビデがこの世の諸侯や裁判官が学識を持ち、またその者等が、神に仕え、神を畏れることを必要としたのと同様に、彼が王たちに悔い改めを必要としたことを貴方方が言及しないことであります。もし、貴方たちが裁判官や諸侯であるなら、だれもそのことを否定する者はいませんが、その時、ダビデの明白な言葉により、貴方方が学識を持ち、神に仕え、神を畏れ、もし、貴方方が、神の宗教の改革を軽蔑するなら、貴方方はそれをする事ができないであろう。これはあなた方の第一の誤りです。第二に、もし、貴方方が喜びやあるいは、恐れにあるこの世の人に対して、神の真の宗教を軽蔑し、そして、神の名において貴方方の支援を求める貴方方の同胞を軽蔑するのでしたら、貴方方は貴方方が神に負っている貴方方の義務をご存じでなく、また、貴方方が受けとめるべき貴方方の義務をわかっていないということでもあります。貴方方の義務は貴方方の神の声を聞くことであり、神の教えに従うことを学ぶ事であります。以前言われたように、神は特に憐れんで、名誉と尊厳をもって貴方方を奮起させるのです。神の主なる教えは、尊厳を持って、神の唯一の御子イエスを受け入れ、心に思うことであり、貴方方は、最大限神の真の宗教を促進し、そして、貴方方の同胞や臣民を守るように、神は貴方方に義務を負わすのであります。

今、もし、貴方たちの王が、神について無知な人で、迷信によって盲目となっていて、神の真の宗教の敵であり、キリストのメンバーを迫害する者であるなら、そしてもし、あなた方が沈黙して彼の罪悪を見逃したなら、貴方たちは許されるのでしょうか？閣下たちよ、貴方方は、だまされてはなりません。貴方方は、愚かで盲目的な猛威を奮っている貴方方の王にへつらうことより、別の目的の

⁶⁾ イザヤ書49章23節参照。

ために権威ある地位についているのであります。すなわち、貴方方の体と権力と富と知恵を持って、貴方方は、王を助け守る義務があり、貴方方の助言によって、王が神の栄光のため、また国家と臣民を擁護するため、これら全てのことを遂行する義務を負っているのであります。そして、貴方方のまじめさと慎重な計画と勧告によって、王が、神の言葉や名誉や栄光を明確に反する事柄を行なおうとし、あるいは、王が無知によって、あるいは、悪意によって臣民の貴賤の上下の別なく、反対するのを貴方方が見いだすならば、貴方方には誤りを正し、抑制する義務があるのであります。そのうち、貴方方の義務に関する最後の部分ですが、貴方方が、貴方方の王をだましてそれを奪ったのなら、貴方方は、王に反抗して反逆したことになります。同様に、もし貴方方が王の敵たちによって、王が不正に訴えられた時は常に支持することを約束していたのに、王を守る義務を果たさなければ、貴方方は王に反対し反逆を犯したことになります。

しかし、これらの服従について、私は、この時代の少数の貴族たちが、正しいと考えていることに不安に思うのであります。また、これらは、神がその目的のため、彼らに勧めていることを理解していないと思うのです。なぜなら、今、すべての人々が歌うコモンソングは、「私たちは、善良でも悪者でも、これに服従しなければならぬ。それは、神がそのように命じたからである。」というものでありますから。そして、その仕返しをする者たちは無礼だとされ、神と聖霊の名と戒めを冒瀆する者だという言葉に浴びさせられるでしょうから。しかし、国王たちが、不敬虔な事柄を命ずるとき、これらの王に従うように神が命じたと言うのであれば、神が一切の不正の作者、または維持者であると言うのに劣らず、神を冒瀆することであり、神が国王たちへの服従を命じたことは確かなことであります。しかし、それは、神の栄光に反対したことにおいて、あるいは、理由もなく、彼らが彼らの同胞、キリストの体のメンバーたちに残酷に猛威を奮ったとき、神が服従を

命じたのではなく、国王たちの不敬虔な命令と盲目的猛威に対し、反抗した人々を、むしろ神は認め、その上、これらの人々に神が大いに報いを与えていることも確かなのであります。三人の子どもたち、ダニエル、エベド・メレクの例で明らかなのであります。三人の子どもたちは、ネブカドネツアル王の命令を無視し、金の像の前で拝もうとしませんでした⁷⁾。ダニエルは、ダレイオスと彼の議会で成立した法に反対し、自分の窓を開いて公けに祈りました⁸⁾。また、エベド・メレクはゼデキヤの面前に出るのを恐れず、そして、思い切って、王と議会が死を宣告した預言者エレミヤの犯行の申し立てと無実を弁護することを恐れませんでした⁹⁾。

これらの事実のどの一つも今日、愚かなことと判断されたり、神の真実が攻撃されたり、あるいは、神の栄光が疑われたりするとき、神が神の子等にどのような告白を要求するかを理解できないのです。私は言いたいのですが、神より人を、そして、天への継承よりも、現在のものを好むような人々は、これらの事実のどの一つも、頑固な不服従とか、愚かなるでしゃばりとか風変わりとして判断してきて、さもなければ、王や王の賢い議会を大胆にもコントロールしていると判断してきたのです。しかし、神の面前で、王の不敬虔な命令と決定に対するこの抵抗がいかにか受け入れられたかは、その結末が証言するのであります。なぜなら、敵が混乱したため、無知な王たちをよりよい方へ導いたために、また苦しめられた神の子らが永久に慰められたために、三人の子どもは火の炉から救われましたし、ダニエルはライオンの穴から救われたのであります。そして、王と議会が神の復讐の苦い杯を飲んだその主が訪れた日に、エベド・メレクは犠牲としてささげられるはずの彼の命は助けられ、多くの者が滅びるとき、彼は剣にかけられることはなかったのです。そして、これは、エルサレムが滅ぼされる前、神

7) ダニエル書3章参照。

8) ダニエル書6章参照。

9) エレミヤ書38章参照。

の命令を預言者が受けて、エベド・メレクに示されたのです。その約束と結末は次のこれらの言葉により、彼に詳しく説明されています。「私は、この都について告げたわたしの言葉を実現させる。それは災いであって、幸いではない。しかし、私は必ず、あなたを救い出す。なぜなら、あなたがわたしを信頼したからである、と主は言われる。¹⁰⁾」エベド・メレクは神を信じ、神に希望をもち、無実であるとわかっている預言者に対して死の宣告をした王や王全体の議会に、彼は、大胆にもただ一人で、反対したのであります。このことに対して、エベド・メレクは、ベニヤミン門の広場に座している王の面前で語りました。「私の主人である王様、(と、エベド・メレクは言っていますが) これらの人々は、預言者エレミヤにありとあらゆるひどいことをしています。¹¹⁾」と。注意してください。閣下たち、預言者を告発した者たちは、王や支配者たちや議会であって、一人の人が、全ての不正を行った彼らを告発し、無実であるその預言者を守るために、大胆にも語ったのであります。そして、私は言いたいのですが、そのことは、全ての人それぞれに与えられた召命としての役割であるのです。そして、彼らの王たちに加えられた主なる貴族は愚かで盲目的猛威を抑制したのです。もし、そのことをその貴族がしなくても、また、そうしようと骨をおらなくても、王国内の貴族たちが彼らの王たちに謀反を起こすでしょう。それは、権威を乱用する王国に反対して激怒し、徳を維持し、悪を抑圧する神を彼らは受け入れたからです。

私は閣下たちがこのことについて納得なされることを強く望みます。つまり、神は貴族階級を、あるいは国民を赦すことを望んだのではなく、貴族たちが明らかに不正を行っている彼らの王たちに決して従わないことを望んだのであります。しかし、この復讐をもって、神は神と神の聖なる命令に対して、共謀している支配者、人々、貴族を罰したいのであり

ます。それは、ファラオ、イスラエル、ユダ、そしてバビロンに負わせられた罰において、はっきりと見られるのです。なぜなら、ファラオはたったひとり、おぼれたのではなく、ファラオの長官たちや馬や大騎兵もファラオと共に同じ杯を飲み、おぼれました。イスラエルやユダの王たちは、仲間もなく罰せられたのではなく、彼らと共に、顧問官たちも殺され、支配者たちは投獄され、人々は捕虜にされました。それでは、それは一体なぜなのでしょう？それは、だれも神を信じる者がなく、あえて彼らの不正に抵抗しようとするが見られないからです。そして、神の激怒は一方にも他方にもそそがれるものなのであるからです。しかし、この議論がいつそう十分に成されればなされるほど、私は、よりよい好機に従うことになるのであります。この好機にだけ、私は、貴方方への勧告が役立つのであり、そして、神の前で、貴方方が、次のような申し立てをすることは赦されないからです。すなわち、「私たちは王ではない、だから私たちは宗教を改革できないし、迫害されている者を守ることもできない。」と。考えてみて下さい。閣下たちよ、貴方方は、神によって権力が、定められているのですから、(前に述べましたが) だから、宗教の改革と不正に圧迫されている者を守ることは、貴方方の義務に属しているのであります。そのことは、すべてのものが保たれるために普遍的に表されている神の法が、非常にはっきりと示していることであります。これが、貴方方は儀礼を取り除くべきであり、神が御自身の口によって非難する者に、死刑宣告をして罰するべきだと言う、私の確信のある理由なのであります。

モーセが、真の宗教とは何かを明らかにした後、すなわち、神が命令したように神を誉め称え、神の言葉以外何も加えず、しかし、そこからなにかを減少させることもなく、そしてまた、法を守ることを非常に熱心に勧めた後、次のこれらの言葉において、罪を犯したものに対して、罰を宣告しました。「もし、あなた方の兄弟、息子、娘、妻、あるいは、あなた方があなた方の命のように愛した隣人

¹⁰⁾ エレミヤ書39章16－18節参照。

¹¹⁾ エレミヤ書38章9節参照。

に、密かに次のように懇願した。『あなたも先祖も知らなかった他の神々に従い、これに仕えようではないか』、と言われても彼に同意してはならないし、また耳を貸してはならない。あなた方の目に彼をあわせようではないか、と言われても、彼に寛大さあるいは、好意を示してはならない。彼にそむくのではなく、しかし、彼を殺さなければならない。彼を殺すには、まずあなた方が手を下しなさい。次に民が皆、それに続く。¹²⁾』

モーセのこれらの言葉の内、私たちの目的に属した2つの注目すべきことがあります。第一に、偶像崇拜だけを切望している者には、人への好意や尊敬なしに死罪にして罰すべきであるということであります。なぜなら、神は彼の息子、娘あるいは、妻のために人を苦しめたのではなく、偶像崇拜者たちが（彼らは決して私たちに属してはいませんが）負っている義務である罰を嚴重に命じたのであります。そして神はたとえ、どんな身分や地位の者であろうと偶像崇拜者を見て見ぬ振りはしないであります。

次のことは知られたことであります。すなわち、預言者は神の啓示を告げられます。そのことは人々に共通してはいません。サムエルはエリと彼の子孫が減ぼされることを告げ¹³⁾、そしてサウルは初めて王になりますが、その後、彼は除かれ、ダビデが支配することを告げました。ミカヤは幻によって、アハブがシリア人たちに反抗して戦って殺されることを理解しました¹⁴⁾。また、エリヤは、イゼベルがイズレエルの壘壁の中で、犬の群の餌食になることを見ました¹⁵⁾。エリシャは、7年もイスラエルに飢饉が続くことを見ました¹⁶⁾。エレミヤはエルサレムの滅亡と捕囚の時を予見しました。そして、他の様々な預言者たちは、神の啓示を様々に告げました。そのことを、人々は別のやり方ではなく彼らの確信によって理解したのです。だから、当時、預言者たちは見る人と名付けられたのです。

なぜならそれは、神が人々に隠されたことを、預言者たちに、示したからです。今、だれかが厳罰から、なにか特権を要求するか、あるいは、その人の事実を正当化しようとしたら、それは預言者が行ってきたことなのです。というのは、預言者は、幻やあるいは、夢によって神の意志が告げられるために、他の人より勝っているということ、あるいは、神が、神の喜びがこうした方法で、そのような場所と方法で、誉め称えられるということを、彼に特別に明言したという優越する特権を自分で、主張していたからです。しかしながら、神は知らない神々に仕える人々に対して、自分で夢や幻や啓示を主張する預言者には処刑することを命じます。そのうえ、神は奇跡を約束し、また、神はそのようなことを行うことを約束しますが、しかし、私は言いたいのですが、神は、その預言者に信頼を示されたのではなく、当の預言者が死ぬことを命じたのです。なぜなら、その預言者は、神から離れ、背教を教えたからであります。

これについて、閣下たちは、偶像崇拜をすすめた者が、死刑から免れられないことを、簡単に認めることでしょう。というのは、もし神御自身が夫と妻を聖別し、不可分な関係がないとしたり、また父と息子の間にびたと結びついているのに言い尽くせるほどの愛がないとしたり、また、神の民が預言者たちに崇敬を抱かず、罪を犯した者を赦したり、あるいは、その人の罪を隠す人を赦したりすることが出来るのでしょうか。いったい、人は、神が認める赦しを望むことなどできるのでしょうか？神が偶像崇拜者の責任を問うたり、あるいは、罪のために罰を加える神の権力を、身分も地位も名誉があってもその偶像崇拜者から除外することはできません。神の命令に従うなら、懇願したり、あるいは、暴力的に人々に偶像崇拜を強要するそのような者を死刑にしない者は、いったい赦されるのでしょうか？そしてこれが、私が、閣下たちに前者の

12) 申命記13章6～9節参照。

13) サムエル記上3章9, 15節参照。

14) 列王記上22章参照。

15) 列王記上21章参照。

16) 列王記下8章参照。

言葉で注目すべきと考えている最初のもので、すなわち、もし、だれかが人々に偶像を崇拜する気にしたり、導いたことが明らかにわかったら、その人は、罰から免れないのであります。そして、このことはアサが民と共に、神に仕えさせ、神の宗教を維持させ、さらに罪を犯す者にこの罰を加えるという宣誓や契約において、非常にはっきりと述べられています。すなわち、「子どもも、大人も、男も女もイスラエルの神、主を求めない者はだれも死刑に処せられる¹⁷⁾」のであり、この誓いは、主を喜ばせました。神は彼らを好み、それぞれに安らぎを与えました。なぜなら、彼らが、主に心を尽くして、人について顧慮することなく神の法の教えに従って、罪を犯した者を罰することを誓ったからです。そして、これは、私は言いたいのですが、閣下たちが、まず、注目してもらいたいことなのです。すなわち、偶像崇拜者たちはだれも、神の法によって、罰を受けることから免れることはできないということです。

第二に、そのような罪の罰を受けるのは、偶像崇拜、すなわち、神を冒瀆し、神を害する者であって、その不敬虔が明らかに知られているとき、神は神の栄光に反してなされる不正への処罰の権利は、王たちや主要な統治者のみに属するのではなく、その国民の全体、ならびに国民の各自に属しているのであります。モーセははっきりと次のこれらの言葉を語っております。「あなたがたの町において（と彼は言っているのだが）、あなた方の神、主があなたに与えて住ませるどこかの町のうわさとして、あなたの中から、ならず者が現れて、つぎのこれらの言葉によって町の住民たちに懇願したとしたら、つまり、『お前たちの知らなかった他の神々に従い、これに仕えようではないか。』とその町の住民を迷わせていることを聞いたなら、それを尋ね、さぐり、よく問いたださねばならない。そして、もし、それが確かな事実であり、そのような憎悪すべき事があなたたちの中で行われ

たのであれば、その町の住民を剣にかけて殺し、町もそこにあるすべてのものも滅ぼし尽くし、剣にかけなければならない。略奪品をすべて広場の中央に集め、略奪品もろとも町全体を焼き払い、あなたの神、主に対して、完全に燃やし尽くさざれば物としなければならない。そして、その町は、永遠に石の山であり、もはや再び建てられることはない。主が激しく怒りをやめ、あなたに愛情を持つように、その嫌われるもののみな、なにも手元にとどめてはならない。」¹⁸⁾と。

モーセは王たちや支配者たちや裁判官たちに、義務を語ったのではなく、彼は明らかに、町全体の人々に、そして、町のそれぞれの構成員に語ったのであります。それでは一体誰が、この非常に分別があり、正当であることについてあつかましく否定するのでしょうか？というのは、神が束縛から、イスラエルの民全体を救ったこと、そして神が全イスラエルの民に神の法を与えたこと、また神が十二部族にカナンの地を分配し、継承したこと、そして、それが各家族に対して、なおざりにされていると訴えられないこと、これらのことを考えて、全体と各メンバーは神の恩恵を告白し認める義務を負っていないと言えるでしょうか？そして、個々人が、受け取ったものを守ろうと思うのではないのでしょうか？神は各々が心の中で主なる神を聖別し、確立した神の宗教を守ること以外、そして、最終的に不正を各々の中から切り離すこと以外、なすべきでないとはっきりと述べています。また、神は、これらの忌まわしい敵に誠意を込めて主張しています。それは、最初は神は非常に（その国の敵を¹⁹⁾）憎み、その国のすべての住民が滅ぼされることを、そして、彼らの偶像崇拜の建物全てを壊すように命じました。また、その後、神は、偶像崇拜に傾く町は剣で倒れることを、そして略奪品すべては、焼かれ、保存されるものはなにもないようにすることを厳しく命じられました。

これは一般の人にとって、非常に厳しい判

¹⁷⁾ 歴代誌下15章13節参照。

¹⁸⁾ 申命記13章12－17節参照。

¹⁹⁾ 拙著補足。

断であると思われます。そして、(その判断は²⁰⁾) 知性的よりもむしろ、激怒して発しているようにみえるでしょう。なぜなら、人の判断では、そこに存在していた町に、幼児や子どもや単純で無知な者たちのような多くの無邪気な者たちが見出せなくなるからです。一体、そのような不敬虔に誰も同意しなかったのでしょうか、また、同意できなかったのでしょうか？ 私たちは、例外なく、全ての者は、残酷な死に定められているのです。そして、その町や略奪品に関しての例のように、人は、火で焼き尽くされるよりも、そして、誰にも利益を与えないよりも与えられた方がよいと思うのです。しかし、そのような場合、神が神の裁きを命じられる時、すべての生き物は身をかがめ、顔をおおい、論理的に考えることを思いとどまろうとするのです。私は、そのような厳しいさまざまな原因を引用することが出来ますが、しかし、聖霊が定めるより他にになにも求めたくありません。第一に、すべてのイスラエルは戒めを聞き、忌むべき事に関わることを恐れるべきでした。そうすれば、第二に、主は神の激しい怒りから転じて、人々に愛をもち、また憐れみをもたれ、神が先祖たちに誓われたとおりに、彼らの数を増やされたでしょう。どちらの理由も、それらが、神の子等が、不平不満をこぼす肉なる人間を十分正そうとしたものであります。しかし、そのことがすべての人を怒らせました。そしてそれは、私が以前のべたように、全ての人に反対して非常に神を怒らせた神の敵に述べるべきことだったのです。モーセは言っています。「町を焼き払い、略奪品を何一つ、あなたの手にとどめないように。そうすれば、主は激しい怒りをやめるであろう。²¹⁾」などなど。少数の背教者と偶像崇拜者によって、神の怒りは全体に対して燃えだたされ、そしてそれは、決してそのような罰は、犯罪者たちに負わせられる義務を果たすまで、消えないのであり、偶像崇拜の下で、仕えていた者

は皆、破滅しました。なぜなら、神の前で、それが忌々しく、憎むべきものであるからです。ですから神は、神の民を用いるために取っておかれることはしたくないのです。

私は、この法が、神が命じたように実行されないことを知らないではありません。しかし、それらについて、歴史がひき続いて起きていることを述べているのです。すなわち、列王記の証言によればイスラエルとユダが捕らえられ、連れて行かれるまで、疫病が次から次と起こったとあります。そのことを考慮するならば、私はさらに大胆にも次のことを確信しています。つまり、それは、疫病を免れ、神の罰を免れることを望む人は、義務としてそれぞれが、(自分は²²⁾) 偶像崇拜の敵であると告白し、心においてだけ偶像崇拜を憎むのではなく、もしそのような憎むべき事のため決して偶像崇拜をしないのであれば、外面的にも、悲しむことを明らかにするべきなのです。それは、なぜ神がイスラエルと共に、ユダを滅ぼすのかというわけを理解させようとした時、預言者エゼキエルが示しました。そして、神は神の栄光を神殿や神が選んだ場所から取り除きました。神の怒りが町中に注がれ、そこは、流血と背教に満ち、そして、彼らは非常に無分別にも次のように言うようになります。「主は、この地を見捨てられた。主は顧みられない。²³⁾」と。私は言いたいのですが、主は、同時に預言者の幻の中に現れました。これは惨めな破壊の中で、神の好意を見出すことが出来ます。すなわち、「都の中で行われているあらゆる忌まわしいことの故に、嘆き悲しんでいる者の額に神は、しるしをつけるように命じた。²⁴⁾」とあります。最後まで、憐れみなしに平安を打ち壊すことを命じた破壊者は、しるしが見える人を傷つけるべきではなかったのです。

《この先の訳は次号に続く予定》

20) 拙著補足。

21) 申命記13章17節参照。

22) 拙著補足。

23) エゼキエル書9章9節参照。

24) エゼキエル書9章4節参照。